





閉校にあたって

北海道妹背牛商業高等学校閉校事業協賛会

会長 古川 隆夫

北海道妹背牛商業高等学校が、地域の過疎化の進行、少子化等時代背景が変化する中で道の高校適性配置計画が示され、平成十八年六月に募集停止案が提示されました。

存続を願う署名活動を行い日本各地より予想を超える十二万筆余りの署名が寄せられ、その熱望もむなしく平成十九年度入学生生徒募集停止となり五十九年の歴史に幕を閉じる事となりました。

顧みますと戦後、国を上げての復興の中で、働く青少年の教育の場として昭和二十四年定時制高校として産声を上げたところであります。開校当時は、校舎が無く旧妹背牛小学校の校舎の一部を間借りしての授業であったと聞いております。

そうした大変厳しい教育環境の中で、並々ならぬご苦労があったと思ひ御努力に対し、深く敬意を表すところであります。以来、新校舎の建設、全日制商業科の設置、道立への移管、現在の新校舎建設等歴史の足跡を残して来たところであります。

特に女子バレーボール部の活躍は昭和五十三年選抜大会での優勝をはじめとする輝かしい成績により本校の名声を高めることとなり地域の方に夢と希望をあたえると共に本町の名を全道、全国に広め地域の振興に大きく寄与した次第であります。

こうして五十九年の歩みを振り返る時、歳月の流れと共に榮え、地域に根ざした学校として、校訓「至誠」の教育精神の基に学び巣立たれた同窓生も四、五八二名にもものぼり町内はもとより道内外の各地域各分野で活躍されているところであり誠に喜ばしい限りであります。

閉校にあたりこれまで幾多の変遷の中で尽力頂いた学校関係者の足跡をたどりその功績を讃えんと共に多くの皆様に永年に渡りご支援に感謝を表し、本校の輝かしい歴史の元に閉校事業協賛会を設立させて頂き事業を計画、準備し進めることが出来、町ならびに学校教育関係、賛同いただいた同窓生の方々等の皆様の温かいご理解とご支援に厚く感謝とお礼を申し上げる次第であります。

今後、妹背牛商業高校の尊い足跡と偉業の数々の歴史が語り継がれる事を念じ感謝とお礼の言葉と致します。



第二十代校長
滝田 進 先生
平成18.4.1～21.3.1

記念誌発刊に寄せて

北海道妹背牛商業高等学校

校長 滝田 進

北海道妹背牛商業高等学校が、このたび多くの方々に惜しまれながら、開校から六〇年目の節目の年に歴史を閉じることになりました。ここに創立以来の輝かしい歴史の足跡をまとめた記念誌が発刊されますことに對しまして、心からお慶び申し上げます。

顧みますと本校は、終戦後の廢墟混乱の中にも学制改革後、昭和二十四年に北海道妹背牛高等学校として定時制課程（普通科・農業科・家庭科）が設置されました。「働きながら学ぶ勤労青少年」にも豊かな教養と専門的な知識を得る学習の場が認められて開校して以来、昭和三十七年全日制商業科六学級設置（定時制 普通科・家庭科募集停止）、昭和三十八年道立移管、昭和四十三年に定時制農業科募集停止、昭和四十四年北海道妹背牛商業高等学校と改称するなど幾多の変遷をたどりながら、今日まで地域に根ざした教育の発展、充実に努めてこられました。

しかしながら、近年の少子化と過疎化にともない、生徒数の減少が急激に進み、平成十八年に募集停止案を受け、道内外の関係者の一方ならぬお力添えにもかかわらず、ここに五十九年の歴史に終止符を打つこととなりました。この間、妹背牛町をはじめとし、地域関係者の皆様からの温かいご協力ご支援を賜りながら、着実に教育実践の成果を積み重ね、二度の教育実践表彰を受賞し、生徒に夢と希望を与え、その具現化をサポートし教育実践してまいりました。部活動においては、昭和六〇年全国高等学校タイプライティング競技大会にて全国三位をはじめ、女子バレー部が昭和四十八年の全国総体準優勝、昭和五十三年には全国選抜大会で全国優勝を成し遂げ、高体連・国体・選抜大会に通算四十三回の出場を果たし、準優勝三回、第三位四回、ベスト八が十一回という輝かしい戦績を残し、その精神は脈々と受け継がれ今日にいたっております。また、これまで本校は、四、五八二名の有為な人材を輩出し、広く道内外の角界各分野において活躍してこられました。これも、ひとえに、開校以来、一方ならぬ教育の真髓の具現化を目指した歴代校長をはじめ、教職員各位、PTAや同窓会のご尽力の賜物であり衷心より感謝申し上げます。

今日のすばらしい歴史と伝統を築いて戴いた関係各位に感謝の誠を捧げ、他界殉職された諸先生方そして若くして他界されました同窓生に、皆さまと共に合掌しご冥福をお祈り申し上げます。

本校にて巣立った卒業生は校訓「至誠」を合言葉にし、教育理念に基づく輝かしい成果と実践は、一人一人の卒業生の心のなかに、そして、後世に活かされ語り継がれるものと信じております。

平成二〇年十一月、妹背牛町庁舎前庭に、桜の木を植樹し、「本校の在りし日々の思いを抱き」植え込みました。今後、十年後の開花を楽しみに妹背商高関係者の「語り、憩い、集い」の絆深きシンボル桜となり、さらに、妹背牛町民の皆様にも夢と希望を与える樹木として愛され樹齢を重ねることを心より願っております。

最後に、閉校事業協賛会に寄せられた町内外有志協賛会各位のご支援ご協力に對して、御礼申し上げます。記念誌発刊にあたっての言葉とします。



北海道妹背牛商業高等学校閉校記念誌の発刊に寄せて

北海道教育委員会

教育長 吉田 洋一

北海道妹背牛商業高等学校は、多くの方に惜しまれながら、平成二十一年三月をもちまして、開校以来五十九年にわたる歴史の幕を閉じることとなりました。

顧みますと本校は、我が国の戦後の復興が軌道に乗り始めた昭和二十四年、働きながら学びたいという地域の多くの青少年の声に応え、定時制の普通科・農業科・家庭科の三科を有する妹背牛村立の北海道妹背牛高等学校として、開校されました。

その後、幾多の変遷を経て、昭和四十四年に北海道妹背牛商業高等学校と校名を変更し、商業科単置校として、校訓「至誠」のもと、地域社会に貢献する職業人の育成を目指し、教職員が一丸となって創意工夫を生かした特色ある教育活動に取り組み、今日に至っております。

商業教育につきましては、総合的な学習の時間「起業プロジェクト」の中で、米どころに立地する学校の特色を生かし、米の栽培・生産から販売までを総合的に学ぶ学習活動や企業と共同し、地域の特産物を活かした商品開発の取組などをおして、生徒の自主性や創造性を育む教育実践を重ねてこられました。

また、地域の伝統文化である「妹背牛ヨイトコ」音頭や地域奨励スポーツである「カーリング」を学校の教育活動に取り入れるなど、地域に根ざした学校づくりに努めてこられました。

部活動においては、多くの部が全道大会や全国大会で活躍される中、とりわけ、女子バレーボール部が昭和五十二年度の全国高校選抜優勝大会での優勝をはじめ、幾度となく各種大会で優秀な成績を収め、全国に妹背牛の名を響かせるとともに、オリンピックの日本代表選手を輩出するなど、輝かしい歴史を刻んでこられました。

本校がこのようなすばらしい成果を収めてこられましたのは、卒業生の皆様の御努力はもとより、歴代の校長先生をはじめ、教職員の方々の御尽力、並びに関係各位の御支援の賜であり、ここに深甚なる敬意と謝意を表するものです。

本校を巣立っていった四千五百余名の卒業生の方々が、地元はもとより道内外の様々な地域で活躍されておりますことは、誠に喜ばしい限りです。

この度、時代の移り変わりの中で、本校がその輝かしい校史を閉じることになりましたことは、誠に残念であり、哀惜の念を禁じ得ませんが、本校の五十九年にわたる優れた教育実践は、北海道教育の中しっかりと息づいており、後世まで受け継がれていくものと確信しております。

生徒の皆さんには、本校で学んだことを誇りとし、これまでの高校生活で得られた知識や経験を糧に、これからも高い志を持ち、自分の夢や希望の実現に向けて、努力を重ねていただきたいと願っております。

終わりになりますが、開校以来、本校教育の充実に、変わらぬ御支援と御協力を賜りました妹背牛町民各位、PTA、同窓会の皆様、衷心よりお礼を申し上げますとともに、関係各位のますますの御発展を祈念し、御挨拶いたします。



第十八代校長
石垣 巧 先生
平成13. 4. 1～15. 3. 31

閉校を惜しんで

北海道高等学校校長協会商業部会

部会長 石垣 巧

北海道妹背牛商業高等学校が閉校を迎えるに当たりご挨拶を申し上げます。

昭和二十四年、普通科、家庭科、農業科の三学科で開校以来、幾多の変遷を経て平成十一年に創立五十周年記念式典を挙げるなど、確かな歴史を刻んでまいりました。しかしながら急激な生徒の減少はいかんともしがたく、今年度末をもって閉校を余儀なくされました。今日までの歴史の重さと同窓生の皆様の母校に寄せる想い、加えてどのような時も学校を支援し続けてきた地域の皆様の心情を思う時、残念というより悲しい思いを抱いています。

五十九年を振り返るとき、本校の功績の一つは地域と一体となった教育でありました。

「開かれた学校づくり」の一環として行われた学校開放講座では、北海道における先駆的な役割を果たしました。地域の皆様の要望に応え、講座の多様化とともに、延べ受講者数は、町民の何倍もの数に達しました。「学びたい人」がいて、その意欲に応える学校がありました。開校と同時に創部されたバレーボール部。試合会場が一気に華やぐオレンジ色と「行け行け妹背商」の声に血を沸き立たせ、コート目を凝らせる。周りを見渡せば、いつも町の人々の顔がありました。学校はもとより、町が学びの場であり町と学校が協働で取り組んできた五十九年の歴史でありました。地域の教育力低下が話題になる昨今、妹背牛町、妹背牛商業高校に限って言えば関係のないことでした。

加えて、生徒一人一人を教え育てるため、持てる力の全てを注ぐ教育が実践されてきたことであります。生徒と目標を共有し一緒に頑張って努力する人がいました。巣立つ生徒に対し、基礎的・基本的で確かな学力を身に付けるため、遅くまで灯る蛍光灯の明かりを当然と受け止める学校でありました。躓きかけた生徒、悩み苦しんでいる生徒に声をかけ続け、どこまでも生徒に寄り添い続ける教育が実践されてきました。まさに一人一人を大切にしている教育に取り組んできた五十九年でありました。このような北海道妹背牛商業高等学校の実践は、これからの本道教育の道しるべとして多くの関係者に受け継がれると確信します。

全校生徒で植樹したエゾヤマザクラ。毎年訪れる桜の開花時に、本校に関わった全ての人を、心をこの地に集わせ、今日までの想いを確かめていただくことを願います。

終わりに、長きにわたり本校を支え慈しみ育てて頂きました地域の皆様、ご指導を頂きました教職員の皆様方をはじめ歴代校長のご努力に敬意と感謝の意を表し、惜別のご挨拶といたします。

現 北海道札幌東商業高等学校長



閉校記念誌の発刊に寄せて

妹背牛町

町長 加藤 榮一

毎年、真新しい制服に身を包み、希望に胸を膨らませ、少し不安そうに、でも笑顔で元気よく「おはようございます」の挨拶が春風の如くとても爽やかでした。

この度、公立高等学校適正配置計画に基づき、北海道妹背牛商業高等学校は平成二十一年三月末をもって閉校する事となり、まことに寂しさを隠し切れません。

思い起こせば本校は昭和二十四年三月、妹背牛小学校の旧青年学校部分に間借りする形で開校されました。当時は、戦後の混乱からようやく立ち直り明るさを取り戻しつつ、新たな力強い日本をつくりあげようと人々が一丸となって力を合わせ、何事にも精一杯取り組んでいた時代。そんな中、本道で初めての新制高等学校定時課程単置校として普通・家庭・農業の三学科での開校は、町民はもとより道民からも大きな期待を集めた出発とお聞きしております。

開設期の生徒の皆さんは、新しい日本を担うべく志を強く持ち、仕事と学業にいそしみ、希望と使命感に燃えながら、本校を卒業されて行かれた事と思います。そして、昭和三十年代から四十年代にかけて日本の経済発展のあらゆる分野において、その一翼を担い大きく貢献されたのであります。

これまで本校は、小規模校の特性を生かしつつ、地域に根ざした教育活動を実践され、数多くの実績を残されてきました。特に、昭和五十三年の全国選抜バレーボール大会での優勝は本校の歴史に残る大きな偉業であります。

真紅の大優勝旗が初めて津軽の海を越えて北海道に渡り、本町の目抜き通りを凱旋したあの日から、本校は全国に名だたる名門校としてその地位を確立しました。以来、日本のどこに行っても妹背牛町と言えば「バレーボールの強い北海道の妹背牛」との答えに、多くの町民が誇りを持ち、大きな勇気を与えられました。

本校が果たしてきた歴史の重さと、四千五百余名の同窓生の皆様の母校に向ける厚い心情を思うとき、この度の閉校は誠に残念であり悲しい思いを抱いております。しかし、校訓である「至誠」のもと培ってきたその精神は、これからも卒業生の皆様の胸に連綿として生き続け、激動の社会にあっても他人に対する思いやりの心を大切に、たくましく人生を切り開いて行かれるものと信じています。

時代の流れのなかで、北海道妹背牛商業高等学校は五十九年間にわたって本道の教育界に果たしてきた輝かしい歴史に静かに幕を閉じ、その使命を終えることとなりますが、本道学校史に刻み込まれたその伝統は、町民等しく忘れることのない誇りであります。

今日まで本校を支えていただきました歴史の校長先生をはじめ先生方、そして関係機関各位に対しまして厚くお礼申し上げ、更に本校を卒業されました皆様方の今後のご多幸をお祈りし、閉校記念誌の発刊に寄せるご挨拶と致します。



閉校にあたって

北海道妹背牛商業高等学校父母と先生の会

会長 水本 雅英

昭和二十四年に開校して以来、幾たびかの変遷を経て、今日まで五十九年という長い歴史と伝統をもち、この学舎の卒業生も四千五百名を超え、皆それぞれに社会人として当地域はもとより、広く道内外の各層各界においてめざましい活躍を見せております。

本校を語る時、第一に出て来るのが、妹背牛商業高校の名を全国に轟かせた女子バレーボール部でしょう。全国大会に通算四十三回の出場、昭和五十三年の優勝をはじめ、準優勝三回、第三位四回、ベスト八が十一回という輝かしい成績を残しております。

その他、過去にはタイプライティング部の全国三位など、商業科本来としての成績も残しており、近年では全国的にも珍しいカーリング部、授業や実習、ボランティア活動など特色ある学校作りでありましたが、近年の厳しい情勢の中、少子化などにより大勢の皆さんの厚い支持があるにもかかわらず、閉校を余儀なくされました。また、地域から一つの高校が無くなる現実に、大変残念な気持ちでなりません。

今の現代社会は厳しい時代を迎えており、少子化の子供たちにも難しい時代ではないでしょうか。情報は飛び交い、弱者が犠牲になる事件事故が後を絶たず、胸が痛む思いも多く感じられます。生徒の数が少ないだけで学校を無くして良いのでしょうか。少人数だからこそ目のゆきとどいた教育の場ができるのではないのでしょうか。厳しい時代だからこそ、今一度地域全体で教育の場を考える時が来ているのではないのでしょうか。

この春で妹背牛商業高校は幕を閉じるわけですが、これまでの輝かしい伝統と歴史は多くの人たちの心の中に残り、この先も語り継がれて行くことでしょう。また私自身、父母として、PTA役員を引き受け、不安な中、PTA会員や教職員の方々に支えられ、そして子供たちの頑張っている姿に勇気づけられて、四年間に渡り無事に大役を終えることができたのだと思います。本当にありがとうございます。

これまで妹背牛商業高校を支えてくださった教職員の方々をはじめ、同窓会及び関係各位、地域の皆様方にはこの場をお借りして心より厚く感謝とお礼を申し上げます。最後になりますが、皆様のご健勝とご多幸を祈念し、閉校の挨拶とさせていただきます。



北海道妹背牛商業高等学校閉校にあたって

北海道妹背牛商業高等学校生徒会

会長 古澤 龍二

妹背牛商業高等学校の五十九年の歴史がこの三月に幕を閉じることになってしまい、最後の生徒会長として大変悲しい気持ちでいっぱいです。この間、本校を巣立たれた諸先輩方も、同じ気持ちを共有していただけるのではないかと思います。

閉校になると最初に聞いた時は、まだ一年生だったので驚きはしましたが、正直言ってあまり実感がわきませんでした。ところが、学年が一つ一つと上がるにつれて、この学校が閉校に近づいていることが日々現実となっていました。

三年生になってからの日々を振り返ってみると、行事などを一つの学年で行わなければいけないなど、一年生や二年生の時とは比べものにならないくらい大変だったのを思い出します。やはり学校祭が一番大変でした。まず、一つの学年なので、どのようなことをやりたいのか、特定のクラスメートに仕事がかたよらないかなど、考えることが山積みでした。しかし、学校祭の準備期間中も執行部の仕事なのに執行部員以外の人が手伝いをしてくれたり、本番当日もそれぞれ個々人の仕事をしっかりとこなし、学校祭全体を盛り上げてくれたりとみんなの心が一つになり、例年と変わらない完成度の高い学校祭として終えることが出来たと自負しています。

もう一つ、最後の年の取り組みとして私たちが力を入れたものに、起業プロジェクトがあります。これは①模擬会社の経営体験を通して、起業・経営の楽しさと大変さ、責任の重要性を学ぶ。②これまでお世話になった地元妹背牛のPRを行う目的のもと、様々な取り組みを通して自主性や創造性を身につける。という二つの目標を掲げて始めたものです。お米の生産、ハーブキャンドルや米粉クッキーなどの商品開発に始まり、これらの品物の商品化、そして販売まで多くの部分を生徒の手で行いました。販売はネット販売に加え本校バレーボール部の最後の記念大会が行われた会場でも即売会を行い、結果としてどの品物もお客様から好評をいただき、多くの方々に喜んでいただけたことは、今までやって来たことが報われた思いを強く実感したものです。

このように私たちは全校生徒二十九名という少ない人数で一致団結して、より多くのことを学ぼうという向上心をもって、少人数だからこそできること、逆に言えば大きな学校にはできないことに挑戦し実現してきました。これらのことを成し遂げることができたのは、これまでの五十九年間にOB、OGの皆さんが先生方や地域の方々、我が校を支えてくださる多くの方々と共に築き上げてきた伝統の賜物と感謝しています。私たちの取り組みが、妹背牛商業高校の歴史の最後のページを飾るのにふさわしいものであったと祈るばかりです。五十九年間のたくさんの思い出が、妹背牛商業高等学校。この妹背牛商業高等学校での思い出は、たとえ校舎がなくなっても色あせるものではないと思います。その思い出を胸に、妹背牛商業高等学校最後の生徒という誇りを持ち、別々の道を歩むことになり

ますが、その名に恥じないようにお互いに頑張っていきましょう。最後に私たち生徒を、そして妹背牛商業高校の五十九年の歴史を支えてくださった全ての皆さんに感謝し、生徒代表の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございます。